

ギリシャの人になろう！

ヒイラギP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺っ子かまってちゃん微ヤンデレクソ強系男の娘サーヴァントは
いかがですか？

ってタイトルにしようかと思いましたが、止めておきました。

ヘラクレスさん。また、ギリシヤの方々には多大なご迷惑をおかけ
いたしますが偉大な存在なら見逃してくれよなく頼むよお〜(媚び)

書いてるうちに中々のカオスになりました。ギリシヤだけじゃ
ねえ!!この作品はこの世全てに迷惑をかけて行く!!!!

ギリシヤ要素が薄くなってるしい〜これならあくギリシヤの神々
も許してくれるよネエエエエ!?!?(天罰)

そして、Fateファンの方へ、「許してください」

目次

ギリシヤの人になろう！	1
人形の城	5
藤丸は困惑した	8
立香は逃亡した	11
貴方を愛している	15
チキチキ！カルデアスパイ24時！1st！	18

ギリシヤの人になろう！

嗚呼、なぜこうなってしまったのか。

背を伝う冷や汗、大地を破り、空を裂きながら疾走する大英雄が迫る。絶対に追いつかれる訳にはいかない。逃げ切るのだ。この逃走に果てがなかったとしても……なぜかって？ 彼が、ヘラクレスが、

ーその瞳に劣情の焰を宿しているからだー

「だあああ!!とーま!れ!ストップ!ヘラクレス!近親姦は未来では禁忌なんだ!」

最大の英雄と名付けられたこのギリシヤで恐らく最も強い男であるヘラクレスが後ろから猛ダツシユで追いかけてくる!それも今日だけの事ではない。ほぼ毎日、で、ある!

「そうか、ならば今のうちに犯しておこう」

「この!上手いこと言ったつもりかよこの好色野郎!馬鹿!すかぼんたん!二刀流!おちん○んブレインブレイブ!!」

今日も今日とてギリシヤは平和そのものだった。

俺こと、ラステンラウスは父ラースピオテクスと父ゼウスの元に産まれた半神だ。……うん。わかる。わかるよ。そのクエスチョンマークがね、俺だつてそうだもん、おかしいもん。ゼウス案件なのもそうだけどパパ&mp;パパって本当に訳がわからない。父ラースピオテクス(以下ラース)によると『好色崇つて呪われて女になっちゃった☆そんで、ゼウスさんに例の如くヤられたって訳よ!』との事だが、50文字にも満たない中で情報量が多すぎる。その呪いのせいか俺の見た目が極めて女に近い中性って感じになってしまったし、ヘラクレスにも求愛されるし……

あつ、そうだ。今更だけど最近流行の転生者です。これから俺の誕生を語っていくんでよろしくお願いします!

深い、深い、海の底のような場所で俺は怠惰に流され彷徨っていた。大体3000年間はそうしていたかと思うが、思考が途中で息を引き取ってしまったからもつと長いかもしれない。そんな感じで冥界ニートをしていた俺ですが、形容するならサルベージかな、そんな感

じでいきなりホームグラウンドから引つ張り出されてしまいました。

「汝 昇れり 時 過去 行く 定 業 深き 者 なり 我? 我

上位 存在 神? である 言語 変換 成功? 不明 なり

探究 難航 我 汝 記録 媒体 使用 人なる者 知る 望む」

「……………(やべえ!喋りかた忘れた!)」

「沈黙 了承? 不明 無視? 不快 む む 是 良い 都合 唯

我 のみ 汝 疾く行け」

「……………!!! (あー、もうお別れか……マイ空間ちゃん……)」

って感じで、言葉が不自由な神様に強引に転生させられたって訳よ、酷くない?……え?喋りかた忘れるのもどうかしてるって?というか神様より酷いつて!いい、いやー、ちっちゃい事は気にすんなよな? マスター。……はあ、俺が悪かった!認めるからヘラクレスを呼ぼうとするのだけは止めて!お願いします!

そりやもう、産まれる時は周りの奴ら全員の鼓膜をぶち破ってやろうと思つてたからねえ、オギヤー!!!って感じでな。そしたら多分魔力のせいだったんだろうけど空間がひん曲がつてね? ラースの呪いとかヘラ叔母さん……お姉さん!……よし、とにかくその人の監視とか全部ネジ切れたんだ!すごいでしょ?

でも、それでラーズが男になっちゃつて、俺の両親は男2人になった。うん。3000年ニートしてもアレが異常な事だという確信があつた。親父なんて、『え?我のラーズちゃんどこ?美少年君、ラーズちゃんどこに行ったか知らない?』なんて言つてたからね?そりや仕方ないけどさ、最高神の威厳とかゼロだったよ(笑)。ぎやああああ!!!バリツと来た!親父もおば、お姉さんに劣らず酷い人だな!「よっしやー!ラーズ、魔術やるぞ!」

俺が生後3ヶ月の時だったかな?ラーズが魔術の稽古をしてくれるとかでさ、師匠になつてくれたのよ。ラーズはすごいんだぞ!なんだって魔女がメディアさんなら魔男はラーズピオテクスだつて噂が立っていたほどなんだから!まあ、間男つて意味も9割9分程含まれていただろうけども、アツウウイ!!ラーズ!悪ノリしたでしょ!?!親父とお、お姉さんがやつたからつてさ!もう!

に良かったあ……マスター。ウトウトしてる？それでぼーつとしてたのか。俺ってば怖がらせたのかと思って軽く落ち込んだよ……無理しないで、ここまで俺の話に付き合ってくれただけでも十分だから、そうだ、やってみたかったことがあるんだ。

ほら！ここ、俺のひざー！ヘラクレスが求めて手に入れるどころか触れることすら叶わなかったラストエンラウスの膝枕だよ？黄金律B（美）は伊達じゃないってね！ありやりや、もう寝てる。ふふ、おやすみなさい俺のマスター……俺も眠くなつて来ちゃったから、マスターの香り、嗅ぎながら寝ちやうのも仕方ない……よ、な？

人形の城

あ、起きた？はい、顔をこっちに向けなさい！えーい、ふきふきー。どう？暖かい濡れタオルで顔拭くの気持ちいいでしょ？あはは！おっさん臭いつて？まあ、肉体年齢的に言えば俺はおっさんに近いんだぜ？そうは見えないけどって言われてもなあ。ラースに付いた呪いの残滓のせいで俺は一生こんな見た目なんだよ。筋肉、ついてるはずなんだけど出力だけ上がってく感じで腕も足も細つちいし、やわつこいしで……

一応どんな相手でもヘラクレスより強かったりしない限りは束になつてかかつてきても一捻りにして見せる自信があるけど、これじゃあ舐められるよなあ、マスターも嫌だろ？こんなヒョロつちくて頼りない体はさ。うん、うん！構わない？むしろ良い、最早推奨するだど？ばーか！コンプレックスを真つ向から褒めちぎってくる奴があるかよ！嬉しい！

……ん、いや何でもないよ。サブリオ影兎から敵性反応を感知したつて連絡来ただけ。うーん、多分あいつなら大丈夫じゃないかな。サブリオ影兎は生存する事にかけては右に出るものはいないし、そもそもウサギとか言つておきながら当たり前のように竜になったり、獅子になったりするからな。

んー、あいつはねえ、月の裏に住む兎なんだ。影の中に入る力と影の中に入った事がある存在に変身する力があってね、旅を始めてー、………3年目かな？うん、きつとそうだ。3年目に出会つたんだ。その時にはもう魔マジックフィスト拳のラウスは卒業していたよ。謎の老人にボコられてすぐ我に帰った。「あれ？俺って魔術師志望だったんじゃ？なんで拳の道極めようとしてんの？」ってね！挑戦者は未だに居たというか、俺との試合が勇士になろうとしてる男の成人儀式みたいな扱いを受けてて本当にしんどかった。

ラースから教わった家事の魔術から発展させる形で研究していいと思うってだから時間が惜しくて惜しくて……そこで自分の代わりになる物を作ろうと思ひ立って、最初に出来たのが人形に買い物に

行ってもらおう魔術だった。外に出たら挑まれるからね。うん。旅をしていたはずがニートに逆戻りさ！もう魂が求めていたんだらうね、引きこもりをさ。刑部姫って誰？似てる？なんでさ、ん？引きこもりだからって……はあ、わかってないなあマスター？ここにいるのはマスターと俺！unders tand？俺の事を見て！俺の事を想っていけば良いの！俺だってヘラクレスヘラクレスってよく言うって？うう……あん畜生には本当に迷惑をかけられまくったから対抗意識があつてつい……わかった！マスターだって誰かを思い浮かべる事もあるよな！許す。でも、俺が一番な？

魔術の研究はどんどん進んでいって、半年もしないうちに布切れ一枚から人形を作って、身の回りの事から例の試合まで全部任せられるようになった。思ってたよりも簡単だった。うーん、マスターにわかるように言えば化学に近いんだよね。え？化学は勘弁してくれ……ふふふ？まーさーかー??に、が、て、なのかあ？可愛いところあるじゃーっ！いてて！頭ぐりぐりしないでくれー！あつ！本当に無理！ごめんなさい！ゆるーしーてー！

そんなこんなで人形を作っては新しい子を設計してを繰り返していたら、いつの間にか家が内側から破裂しちやつてさあ。気づかなかったよ、寝てるだけで何の不自もなかったからね。伝承には他人から見た俺の事しか書いてないから、こっちの視点で聞くのは新鮮か？全く、近所の人もひどいよな、『布の化物が我先にと空間から溢れ出し、瞬く間に積み上がって城となった。その奇怪な人形と城の主人こそラステンラウスである』だっけ？俺はただ人形を作りすぎただけだったんだけど、何より布の化物って言われたのが頭にきて、居着いた国の人全てに聞こえるように

「人形の城ってーのはこういうのなんだよおおお!!!」

って叫んで作ったのが、今マスターがいる場所でもある人形の城つて訳。

あー……影^{サバリオ}兔が撤退した。ちよつと出てくるね。影がある限りダメージが入ることは無いはず……ガウエイン。いや、カルナか？マスターはここにいてね？お願いだよ？

ふふ、予想を上回って2人ともいるとはね、そりゃあ影兎サバリオも負ける訳だ。

「味方に刃を向けるのは避けたい所だが、マスターを拉致されては仕方が無い。ラステンラウス。こちらとて負けるつもりは毛頭無いが、先に言っておく。マスターを引き渡し降伏する気はあるか？」

「貴方の行動は群体の呼吸を乱す……お分かりでしょう？ さあ、マスターをこちらへ」

戦いたい盛りの猿どもが……殺気が漏れてるんだよ。

「……そうだな。俺も戦士クシャトリアの1人だ。強者との戦いを前にすれば武者震いの一つもする」

お前の武者震いは空気を揺らすほどか？ まあ、いいさ。見たところワンサイドゲームは確定してる。

「布でできたあなたの人形は炎と相性が悪い。大言壮語は後に身を滅ぼしますよ？」

俺の逸話を予習してないな？ それは傲りだぞ？ まあ、いい。授業だ。俺はヘラクレスやその他の神の血を持つ者に言い寄られて発狂寸前だった。そこで巨人の血を貰い、飲む事で神性を持つ存在から干渉を受けない体を手に入れた。わかるか？ カルナは神の子だろ？ だから俺には傷一つつけられない。

「私を忘れないでください」

凄いや殺気じゃないか。まさか俺をあのカメモロットの選ばれなかった民たちのように肅正するつもりか？

「なっ……貴様……っ」

俺はねえ、ただマスターに俺のこと知ってもらって、好きになっってもらって、俺もマスターのこと知って、好きになる。そのための時間が欲しいってそれだけなんだ。その間はカルデアからマスターを隔離するってだけじゃん？ 第一さ、サーヴァントが多すぎるんだよね。変なものも多いし、邪魔しないで欲しいなあ。目的が済んだらマスターと一緒に帰るからさ。

「戦いは避けられないようですね。構えなさいラウス」

我が血は三つに混ざりて剣と成る【三血鉄剣トリニテイ】

藤丸は困惑した

カルデアのサーヴァントの1人であるラステンラウスの事を俺は一切知らなかった。マッシュもダヴィンチちゃんも……ロマン先生も知っていたし、他のサーヴァントたちの中に彼との面識がある人もいた。

その先進的な設定からサブカルチャーの分野で一定以上の需要を持ち（何処かの教授がラステンラウスの逸話を考えた奴はきっと日本人の先祖に違いないと真面目に論文を書いたことすらあるらしい）ヘラクレスと同レベルの知名度を持つギリシャの英雄らしいが不思議なことにも名前の一つも聞いたことがない。

そんな有名な英雄を知らないなんてあり得るのだろうか？自分はおかしくなってしまったのか？もしくは――

ここが、別世界である可能性

馬鹿馬鹿しいにも程がある推論だが、フレンドという形で別世界線が存在する事を知ってしまった俺にはどうにもこの考えが正しいとしか思えなかった。

おかしい、フレンドが1人もいないのだ。いや、ぼっちと言うわけではない。断じて無い。サーヴァントや過去の人間、魔術師等のちよつとズレてる人達とばかり話していたせいで日常的なコミュニケーションに支障をきたしてなんかいない。……この世界は他との繋がりが絶たれているのか？

とにかく、元の世界とほとんど変わらない中で一つだけの大きな違いであるラステンラウスには注意を払う事にする。いや、あれで男なのか？可愛くね？元のカルデアにも欲しいかも知れん。

大体身長は165くらいか？ウエストは細くて、腰はいい曲線だ。髪も肌も綺麗で何食って育ったんだよ。顔は整っている。美人というよりは可愛い系なのだが、女神達から感じるような神聖さを帯びている。「神」「人」「巨人」の漢字がプリントされたいわゆるダサTシャツを見に纏っていること以外は特におかしい点もない。……なんで漢字？君日本鯖じゃ無いよね？

ラステンラウスの人形が近寄ってきたので手に取って眺めてみると刺繍で目の所が二重になっていたり女型と男型で体のラインだけでなく指の長さや足の大きさまで拘っていたりとその高いクオリティに見惚れてしまった所、後ろからラステンラウスの声が・・・

話してみると、どうやら後をつけたりジロジロ見ていたことがバレていたようだ。不審がられているのをひしひしと感じる。ここで変な誤魔化しをすれば逆効果だと今までのカルデアライフ（清姫とか清姫とかその他は考えたくないです・・・）で思い知っていたので、思い切って事情を話してみる事にした。嫌な予感がするので停滞が続く事は避けたい。

マイルームで記憶にラステンラウスという英霊の記憶がない事を話した。：あれ、一瞬笑顔になった？

ラウスが言うには俺の魂をここに呼んだ者がいるらしい。情報を交換しようとしたが、ここではダメだと断られた。カルデアに黒幕がいる場合聞かれているとまずいという事らしい。俺とした事が失念していた。カルデアの誰が黒幕か、その目的は何か、一切わからない中で唯一安全な場所である人形の城と言う場所まで連れて行ってもらう事になった。陣地作成と似たスキルで作られた城らしい。なるほど、確かに安全だ。

ゲートのようなものに入ると、出たのは辺り一面布の部屋。と言うか名前の通りに人形で作られた建造物なのだろうか。

どうやって移動したのかと聞いてみたのだが、時空間転移の応用による実質観測不可能な異空間に跳んだ？とかなんとか。全くわからんけど、ラウスがめちやくちやな性能のサーヴァントである事はなんとなく予想できた。

カルデアに人形を放ち諜報活動をさせている間はここに籠城して外部との接触を断とうと提案されたがそんなもん認められませんよ!? つーか、監禁じゃんアゼルバイジャン!

あかーん! ラウス君はきよひーサイドのサーヴァントでした! 俺の何処に監禁しておくような好感を持ったんですかねえ!? 無理やり外に出ようとしたらココロココロされる可能性が大きいので必死に令呪

を擦っている。タスケテタスケテアブラカタブラー！

というかこれ、俺の魂を呼んだのって……頭が痛い。とても、とても頭が痛い。何も考えられない。……ラウスを呼ばなくては。

昨日、ラウスを疑った瞬間にひどい頭痛が走ったことから何かしらのブロックワードがあり言葉にするしなないに関わらず肉体的な痛みを生じさせる何か術式のようなものがあると推測する。

ここから出るには、痛み。解放されるには、痛み。ラウス好き、反応無し。マシユ好き、痛み。筋肉パラダイス、反応無し。本格的パンツレ……痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!!

大体この空間に張り巡らされた術式が何に反応するのかはわかった。真夏の夜のいん……いでええええ!!……こんな風にある一種のネタに対してかなり強く反応する。毎晩毎晩聞かせられるラウスの武勇伝の中でもよく男に求婚されてボコボコにする話が出てくるので本人にはトラウマなのかも知れない。

今日、このカルデアのサーヴァントが俺を助けにきた。ありがたいなあ……^{サブリオ}影兎というラウスの相棒のような兎がいるのだが、ぶつちやけスフィックス辺りの神獣より全然強い。だってオリジナルのヒュドラや巨人。なんならヘラクレスにだって変身出来るぶつ壊れ能力があるからだ。なおラウスはこれより強い模様。本当に元のカルデアにも欲しい性能だ。がんばえーかるであー！

うーん。ダメでした。悲しいなあ。強いキヤスターが近接をしたがるのはなんで？「俺の事いつでも見られるようにしといたぜ！もちろん俺からもマスターが見える！嬉しいだろ？俺は嬉しい！」と渡されたモニター付きの人形で観戦していたがガウエインとカルナを相手にして勝利するキヤスターってどういう事だよ。

だが、一つ収穫があるとしたら城の外に出られないというわけでもなく、カルデアからはここが観測できている事だ。令呪の存在がビーコンのような役割になっているのだろう。ラウスがこの事に気がついて俺から令呪を奪う事はしまい。ふはは、令呪様々だぜえ……んで、いつ出られるの？

立香は逃亡した

あの世界は狂っている。いや、狂わされた！あの魔女……いや魔男に！あいつが僕ではない平行世界の藤丸立香に恋慕の感情を抱いていることは薄々感づいていたが……まさか僕の魂を消滅させようともですとは思わなかった。

僕の魂が脅かされる前になんとか密かにつくっておいたホムンクルスに体を鞍替えし速攻で逃げ出す事に成功した。何処につて？そりや平行世界さ！あいつが世界を隔離する時にその術式は記憶した。ちよいと開けて、出て、閉めるなんて楽勝なのさ。そもそも Fate システムの魂の物質化さえ模倣した僕の魔眼に不可能はない！つてね。

さてさて、僕をひどい目に合わせようとしたあいつには報いを受けてもらおうかな？彼が元いたカルデアを導いてあいつの言う所の「新婚」とやらを台無しにしてやる。

お邪魔しまゝす。ん？何故サーヴァントが顕界できているんだ？つてそんなに警戒しないでくれよ。ソ ロ モ ン 君？

ハッハア！本当にロマニが臆病な善人で良かった。バラされたくなかつたらしくなんて脅しが通用するなんて思いもなかったよ。そもそも初対面のやつが何を言ってもカルデアの誰も信じやしないだろうに

驚いた。全くのイレギュラーだ。このカルデアにはマスターが2人もいる。藤丸立香が誘拐されたので実際には1人だが……というか、自惚れではないが藤丸立香は人理焼却の存在する全並行世界において世界を救う存在のはずだ。それが居なくなっても重要視されていないなんておかしいぞ？

手始めに強固な存在の隠蔽工作をした記録用の使い魔を放ちこの異端のカルデアを調査する事にした。内装やあいつがいない事以外サーヴァントにも変化は見受けられないが、果たしてこのマスターがどんな野郎か見てやろうじゃないか

あつきれた！まじでごみ！あほんだら！恥知らずとはこのことか

？高レベルの魔眼持ちとして恥ずかしいぞ。このマスターである鳥奪 凍夜という男は「略奪の魔眼」という魔眼を持っていた事がわかった。強力ではあるのだがぶっちゃけ限定的な効果が過ぎる。人生の中で一度だけ発動可能で対象と定めた相手がこれからの人生で得ると定められた物を全て略奪すると言った物らしい。どれだけ藤丸立香憎かったんだよお前。サーヴァントにでも使えよ……ばかじゃん。

奴の動向を探ってみれば、サーヴァントと姦淫し放題。男の英霊を強力な個体を除いて不当な処遇をし、ここにいたはずの藤丸立香から奪い取った英雄たちからの愛情を振りかざして我が物顔でふんぞりかえっている。

藤丸立香がいなくなった事はカルデアの全員が知ってはいるようで、こいつがいなくなれば人理修復への道が閉ざされてしまう事から反抗的な態度をとっていた一部の英霊すら上辺だけとはいえ忠誠を誓うようになってしまっていた。

更にデータベースを漁ればわざと監視カメラに映るように実行された藤丸立香への暴力行為。精神的暴行。凍夜に感化されてその悪意に流されたカルデア職員さえもがその明確な弱い物いじめに賛同していた。その際、凍夜が口にしていた言葉の中に多くの共通点が認められた。

『お前みたいな運がいいだけのやつより俺の方が上手くやれるんだ！』

『俺のマシユだ！もうお前の女じゃない！ははは！俺の方が上だああああ!!!』

『何とか言えよ！自分の方が下だって土下座して宣言しろ！あつ！そうだあ……お前さあ、セルフギアスクロールで俺に隷属を誓えよ。じやなきやもつつつと痛い事しちやおつかなあゝ』

『何やってんの？……はあ！魔術の練習だとお？（俺の魔眼にフィードバックされてねえ……努力は定められた獲得じゃ無いって事か？）お前には無理だよ！無理無理！やめちまえ！』

このように上から言葉を投げかけている割には藤丸立香を恐れて

いる事がわかる。ははぁーん？こいつう……こわいのかなあ？うわははは!!滑稽だ！僕の魔眼には全てが映る！その恐怖も！弱い立場のものを虐げて得る馬鹿馬鹿しい快樂も！全て僕が笑ってやろう！

ところでだ。ロマニ先生。気になつていたんだが君は何故医務室ではなく地下倉庫にいるんだ？そもそもこんな備蓄量じゃあ僕が食料を持ってきていかなかったらここで生き絶えていただろう。

「ははは、鳥奪君にしてやられちゃってねえ。藤丸君には本当に申し訳ないと思つているんだ。作戦的価値が高い鳥奪君ばかりに気を取られてしまつて、本来なら僕こそが藤丸君のそばにいてあげないといけなかったのに……」

そんな事はいい。だが、ロマニ先生はあいつに何故ここに入れられた？ソロモンであるお前の最後の指輪がなくてはゲータィアを攻略する事は難しい筈だ。君に対してこんな対応をすれば最悪決戦の日の前に先生は死に、世界は焼却されてしまうかもしれないというに

「なっ!!君は一体どこまで知つて!!」

ふふふふふーん!!ふーん!ふーん!僕は閉ざされたカルデアの藤丸立香!左に「観測の魔眼」を右に「夢現の魔眼」を持つ恐らく純粋なスペックでは最高の力を持つ藤丸立香さ!オッドアイかつ赤と青!かっこいいだろ?お気に入りなんだ!ホムンクルスを作る時でもこの魔眼の再現には一番時間をかけていてだね?いやあく大変だった。何しろ向こうでは生殺与奪権があいつに握られっぱなしだったしなあ……

「まつて!待ってくれ!藤丸立香?ホムンクルス?閉ざされたカルデア?情報量が多すぎる!ゆっく〜り僕にもわかるように説明してくれ!」

はあ!?!僕だつてこんな異端のカルデアにきてびっくりしているんだ!今日はもう眠らせてもらうよ。あと!僕つて一人称は僕のアイデンティティだ!即刻やめろお!

「いきなり来ておいて尊大すぎる!?!つてか眠つた!?!こんなのが藤丸君

の同位体だなんて信じがたいな……」

……は？むしろこっちがそう言いたいのだが？あんな低スペックが僕の同位体だなんて……全く僕の名誉に傷が付くつてもんだよな
「うわー起きてるし。めんどくさいな藤丸君だなあ……」

面倒なのはどっちだ！とにかく僕が来たからにはこの腐り切ったカルデア、ぶっ壊してやろう。安心しろソロモン王。よし！本当に寝る！お前も寝ろ！隈が目立つぞ！

「こういう所が藤丸立香たる所以なのかなあ……じゃあ、おやすみなさい人類最後のマスター、藤丸立香君……」

貴方を愛している

(あの英霊どもを撃退してからというもの、俺とマスターとの間には幸せそのものな時間が流れていた。というかマスターが入れ替わっているのに気づいてるはずなのに変わらず忠誠心を抱いているとかどういふ事だよ騎士の鏡かよ)

ああ、幸福で死んでしまいうだ！でも、もちろん死んでやったりはしないぞ！マスターと死ぬまで一緒にいるし、もしどちらかが死にそうでも俺なら、そして、マスターの令呪なら繋ぎ止められる。でしよ？だから俺たちは永遠。そもそも、マスターが本当に帰りたいと思つたならその令呪を使えばいい。てことは俺を心の何処かで受け入れちやつたんだよな？

否定、しないんだ。……だよ。俺がマスターを見つけた時マスターの煌めきは燻って今にも消えそうになっていた。あの汚物のせいだな。

おいおい、そこで俺を睨むのは人が良すぎるって話だぜ？まあ、そのお人好し感情がマスターの煌めきなのかもしれないけど。

なんで平行世界のことかわかるんだって？いまさらすぎるよ！？そりや俺は深遠と呼ばれる全ての終着点に沈んでいた身寄りの無い魂の転生体だし。初耳？うん！今初めて話した！

えへへ、うっかりです。許してください……っくく!!可愛いつて！可愛いつて言ったな!?!きゃー!……本当の、事だから？ツイ、イツテシマツタ?!?!もうー!もー!気悪くするとかあり得ないからなー!?!むしろ嬉しさ全開で爆ぜるわ!うん!好きな人に可愛いつて言われたら嬉しいよ!?

はあ、はあ、はあ、マスターも中々にやるね?発言全てが的確過ぎて10割コンボで殺しに來られる格ゲーキャラの気持ちだったよ。大袈裟だつて?はああ…マスターは、いや君は自己評価が低すぎるよ。この俺が惚れた魂なんだからもつと胸を張っていいんだよ?

深遠が何かつて?説明は難しいな。うーん、根源つてあるだろ?あ、わからない……一応でもマスターつて魔術う使えるんだよな?

あ、魔術回路すらろくに作れない。ん？じゃあ魔術の練習してたエピソードってなに!?魔術回路を作る練習って……まっつて、その知識をマスターに授けたのは誰だ?ま、ま、まさか女!?

ああ〜!エミヤ君か!彼ならマスターを放っておきはしないだろうね!そりゃあ知つていても。全事象は深遠に漂着するから、彼の事は知っているよ。も!ち!ろ!ん!マスターの事もしつかり記録されてる!

はい!そこ!この言葉で暗い表情しない事お!俺がマスターを知ることができたのはマスターがあんな場所でも希望を失わずにくれたからなんだから……も!こ!う!な!つ!た!ら!マ!ス!タ!ー!の!元!い!た!世!界!に!出!向!い!て!文!句!言!つ!て!や!ろ!う!か!!!

(いきなりマスターに抱きつかれてしまいました!どうする!俺!)

……俺は奪われやしないよ。だってそういう英雄だからね。そうだろ?ヘラクレスが手に入れられない男をあんなビビリ虫にどうこうできるはずもない。信じてくれ。俺のマスター……

ん?それとこれとは別に侵略行為は許可できない……あつ、そう、です、か……ここから始まる逆襲劇とかは、うん。わかってる。もちろん無いよね?!?マスターがそういう人だつて知つてたし!俺のマスターにふぎけたことしやがった馬鹿をあわよくば死ぬより辛い目に合わせてやろうなんて画策してないし!わ!わ!わ!……

というかさ。あんな所によく帰ろうとするよね。俺だつたら絶対帰らないよ。なんなら破壊して逃げる。

へえ、ダヴィンチに恩がある。へえ、じゃあマスター。テストな、レオナルド・ダヴィンチがどんな男か言つて?

美しさを探求した末モナ・リザを生み出した絵描きであり、天文学者であり、数学者であり、発明家であり、多岐にわたり才能を発揮したまさに……万能の……うがあああ!!!ベタ褒めじゃ無いかああああ!!!いいか?レオナルド・ダヴィンチは!最低でもサーヴァントとしては!自分で書いた絵の女にTSしてその見た目を自画自賛する変態なんだ! u n d e r s t a n d ! ? 理 解 し ろ ! 少 な かならず俺の前ではその話をやめろ!……いや!してみろ!ゼー!ー!ん

ぶ俺がそれより凄いことしてやる！みーてーろーよー!!!マスターは渡さないんだからなっ!!

はあー。深遠について説明するつもりだったのに、ライバルの存在が明らかになるなんて……気を取り直してつと

英雄ラステンラウスのくっ！深遠！解説！

文字の色は気にするな！

深遠っていうのは簡単に言えばゴミ捨て場みたいな所だ。でも唯のゴミ箱じゃ無い。深遠には世界が捨てたものやこれから世界が捨てる予定のものが全部入ってる。

で、この捨てられる物の中には過去の記録や暫定事象で消えた世界そのものも含まれている訳なのです！

今の先生っぽく無いか？どう？新米男教師ラステンラウス！また可愛いって言った！もう!!そこは知的っていう所だろ？

ごほん！なんで捨てられる予定のものまで流れてくるかっていうと、深遠には時間の概念がないんだ。明日も来年も白亜紀も全て同一に記録、あるいは廃棄物として扱われる。だから遠い遠い未来さえずれ捨てられる過去として流れてくる訳だ。

根源つてのがあって、それを源流と例えるなら、あの場所はまさに海の底だ。世界という流れが最後に行き着く場所。究極の終わりの形。……まあ、そこで始^{うまれた}まったのが俺なんだけどさ。

まあ、そういう事。やっぱりよく分からんって顔だ。正直俺にもはつきりとわかってる訳じゃないんだ。時間に換算すれば3000年。途中で数えなくなったから更に多いかも知れない。それだけの時間を使っても、世界がそのままの意味で無限では知り尽くすことはできない。自明だな！

シヨタジジイ？は？腹腸の代わりに綿詰めて人形にするよ？ははは！冗談だつて！ははは！ははははははは!!!

所で、仏の顔も三度つてことわざ知ってる？

チキチキ！カルデアスパイ24時！1st！

どうも、僕だ！目覚めたぞ！ロマニ先生！

という訳で別のカルデアに来て2日目の朝であるが……目覚めたロマニ先生が露骨に嫌そうな顔をしているのが至極気に入らん。最優の藤丸立香ことこの僕が起き抜けの癒しとなっっているはずなのに。「その自尊心は尊敬に値するよ……夢だけど夢じゃなかったってセリフはいい事が起きたときに言いたかったなあ」

そうか、それはそれとしてこのカルデアの状況把握ができた所で僕はこの工房化と主要サーヴァントの抱き込みを開始したいと考えている。仮にもカルデアの医療チームならメンタルコントロール力を悪用して案を出せ。

「仮にも医療に携わる者になんて事を!?というか本格的にカルデアをどうにかするつもりなんだね怖い！」

僕は不要な嘘はつかない。とりあえず工房化には一時間はかかるだろうが、優秀な僕は目覚めてからすでに取り掛かっていたため出来上がった物がこちらになる。周りをよく見るがいい。

「え?って何これ!?僕の知らないうちに倉庫がめちやくちや広くなってる!？」

空間の拡張だ。シャドウボーダーにも使われているだろう?……あー、いや忘れてくれ。

ロマニ先生と来ればあとはダヴィンチだが、使い魔による探索で捕捉できなかつたな。情報を寄越せ。

「高圧的だな本当に特殊な目の持ち主にいい思い出が無いよ本当に、ああマシユと藤丸君がいればなあ……」

マ、マシユキリエライトの名前をだすな!!

「ええ!?あの清楚と天然の権化のようなマシユになんのトラウマが!？」

あ?!?!マシユキリエライトが清楚?天然だあ?!あの女は出会うや否や僕に「なんか、臭いですね。傲慢なクズの臭い匂いがします。もしかして、先輩の体臭ですか?ありえませんが。認めません。早く消臭

してください。いえ、それでは駄目ですね。人理修復を遂げたらすぐに無に帰ってください」と豚を見るような目で……クソっ！仮にもAチームの一員だった僕に対してあの女あ！

「そっちのマシユ凶悪すぎる!? ってAチームだったの君? でもそうか。ここを工房化する時の手際といい使い魔の隠匿技術といい並の魔術師じゃない事はわかっていたし、不思議ではないか」

不思議では無いではなく当たり前だ。僕ほどの男が望まれない組織は無いんだからね。優秀な僕だからこそあの日爆発に飲まれる事なく生き延びたというわけさ。

「それこそ、レフ・ライノールなら優秀な者を優先して殺そうとするはずだ。よく逃げ切ったね」

ああ、オルガマリィがセリフを噛んだ時に煽り倒してやってな。あの節穴悪魔には止められたが痲癩を起こしたオルガマリィに見事追い出されることに成功したって訳だ。さすが僕。周囲からの僕への評価を鑑みたスマートな作戦だ。

「え、えげつない……」

ほげけ。生きるために手段など選ぶものか。いや、主義に反する事は死んでもしないがな！

「所でレオナルドの事だけど、彼女は確かだいぶ前から自分の作業室に閉じこもってしまった筈だ。強固な防壁があつたから使い魔が侵入できなかったんじゃないかな」

む、そうか。ならば僕らが出向くしか無いな

「え、今僕らって言った?」

当たり前前だ。万が一、億が一ここがバレたとして誰がお前を守るのだ? まさか僕の作った工房の中でぬくぬくとニート出来るとでも思っているのか? わかったらこの礼装をつけるがいい。

「検査するまでもなくとんでもない一品だ。これも君が作ったのか」
僕の優秀さに感涙を流すのは構わないが、さっさと動くぞ。近頃この糞マスターの奴はおたのしみにふけているようだが、いつ気変りするか知れん。

ロマニ先生の奴、工房から出るまでずっとふてくされていた癖に出

たと思つたらいきなりハイテンションになった。……長い間暗い地下倉庫に閉じ込められていた事で想像より参っていたようだ。壊れる前に発散させておくか

サーヴァントを一箇所に集めて自分の世話をさせるとは馬鹿な奴だ。いいなりになってるサーヴァントは何故あの糞野郎に忠誠を抱いているのかすらわかるまい。そういう魔眼とはいえ気の毒になるな。

「君に相手を気の毒に思う気持ちが残っているなんて……!」

いい気になるなよロマニ・アーキマン。ぶっ殺すぞ。

「理屈っぽい君がそんなに感情的になる程か!」

いいから行くぞ。ダヴィンチの頭脳はカルデア攻略において必要不可欠だ。そ、それに……お前の隣にダヴィンチがいる光景には個人的な思い入れがあつてな……

「それに?」

黙れへたれ医者!カルデアの黄金比の話だ!これ以上の追求は許さん!!

「すつごく理不尽!何言つたのか気になるじゃないか!」

そういう風にネチネチしつこいから扱いが悪くなっていくのだ。あほー。

「罵倒すら雑になつて行く……!?!」

もうそろそろ目的地だな。細かい場所はお前がいるから探す必要も無い。やはり連れてきたのは正解だな。さつすが僕!

「流されたし……うん。もうレオナルドの作業室は目と鼻の先さ!管制室には一部職員が常駐している事を除けば大した障害もないだろう」

カルデア職員が敵対しているのか?人望が無さすぎるぞロマニ先生……あ、コミュニケーション能力が欠如した先生には無理、か。

「酷い!気にしてるのに!そんな的確に射抜かなくてもいいだろ!?!皆んな彼に支配されているんだ。サーヴァントという力を持った彼に逆らおうとはしないよ……」

……まずい。誰かくるぞ。話の途中だが(恐らく)敵対反応だ!!

「それ僕のセリフウウ!!」

「そ、そこにいるのはロマニ医師……なのか？隣にいるのは一体誰だ？」

あ？お前……確かカルパツチョ、だったか？

「ムニエルだ！なんだお前!?普通に侵入者じゃないか!」

黙れシユリンプ。焼いて食うぞ。

「こいつつー聞いた上で間違えやがった!!ロマニ医師!?なんでこんな奴と居るんだ？心配させやがって!」

「し、心配？職員は全員烏奪君の支配下にあるとばかり……良心はまだ残っていたんだなあ……」

馬鹿め、個人としては優しい奴だったとしても集団になれば個人の意思などすぐさま消え去る。昏倒させるぞ。

「ま、まま待つて!?!物騒すぎる!降伏する!降伏しまーす!そのバチバチしたのやめて!」

「君は無抵抗の男を一方的に叩き伏せるような奴ではない筈だよ？現在の事情を知る人を確保するのは重要な事だよ？やめようよ!ね?ね!?!」

ちい!運が良かったなロブスター!

「だーかーらー!それやめろよ!?!」

というかお前らうるさいぞ。ここが敵地だと忘れるんじゃない!目的を果たすぞ。

「あ、そうだった」

「目的ってなんです？自分にも教えてくださいよ」

ダヴィンチの回収だ。お前らの元仲間だろう？情があるなら口外するなよ?」

「あー!もう!わかったから。これ見よがしに攻撃魔術をチラつかせるな!」

よし。ここだな?ロマニ先生。

「うん。ここであってるはずだ」

よし。防壁も確認した。このレベルの防壁を築けるのはダヴィンチくらいのもだろう。破壊するぞ。

「は、破壊い!?!」

かけられた術式だけな。物理的破壊はできない事はないが、音がデカすぎる。術式破壊だけならロマニ先生と僕の礼装があれば壊せるからな。そら、壊したぞ。

ダヴィンチ！確保!!!

「レオナルド！本当にごめん！」

「ちよ、ちよつと!?!どうして入ってこれるのさ!?!って離せ！おい！つてロマニ!!無事だったのかあああああ!!!」

駆け抜ける！ロマニ先生は海老フライを持って走れ！

「ムーニーエール!?!!!そもそもムニエルと海老は関係ないだろおおおおお?!?!」

「ムニエル君。失礼ツ!!」

この日僕達は、一陣の風になった……………